



龍谷大学校友会 兵庫県・丹篠支部会報 第3号

2020年8月 発行

新型コロナウイルス感染拡大防止の為に閉じられた大学の正門

世の中に通じる活動を



「新型コロナウイルス感染拡大」による緊急事態宣言や休業要請が解除となり、ようやく通常の生活が戻りつつある今日この頃ですが、経済的後遺症の回復に今後数年程はかかるようです。

さて、我が龍谷大学校友会事業も、様々な事業を中止せざるを得ず、その活動の勢いをそがれております。そんな中、「龍谷大、隠れた起業の雄」として2019年11月30付日本経済新聞の掲載に続き、本年5月の同紙の「全国大学発スタートアップ起業数ランクベスト20校」の中で東大、京大、阪大がベスト3、私大においては、早稲田、慶應に次いで関西では断トツの14位に我が龍谷大が入りました。世の中に通じる研究が評価されたということでしょうか。丹波地方においても、このような評価が得られる活動ができたらうれしいことだと夢見ております。近年丹波地方にも、本学から数々の学部教授陣が、来丹されるようになっております。

NHK大河ドラマ「麒麟がくる」も2か月ほどの空白は、コロナの影響ですが、なかなかの「好評」の中、物語が推移している様です。大原拓氏(本学文学部1996年卒)の演出の冴えもさることながら、「時代考証」の小和田哲男氏の力も甚大です。出演キャストの意外な抜擢も面白く見させて頂いております。大河の舞台が、丹波に近づくに従い丹波の経済動向も、右肩上がりに回復することを願っております。

支
部
長
浅
田
芳
生

コロナ禍で龍谷大学も全面オンライン授業へ



平素より校友会の皆様にはひとかたならぬご支援に感謝申し上げます。

2020年コロナ禍で、龍谷大学の教育も様変わりしました。前期は、実験・実習など実技的な授業を除き、オンライン授業に全面的に切り替えました。授業をライブ配信したり、授業録画をオンデマンドで配信しています。私は、相棒のMacBookAirとiPadを使い、学生のいない教室で板書して解説したり、iPadの画面を見せながらGoogle Meetというシステムを使って授業をライブ配信しています。

見た目にはかなり孤独な授業風景ですが、マイクがミュートになっていて、音声無しの失敗をした時には、学生がチャットで「マイク入っていません」と教えてくれたりします。

また、授業終了後にチャットに「ありがとうございました」と書き込んで退出する学生も多数いて、会釈して教室を出る学生を思い浮かべ、PCに向かって私は「お疲れ様」と声をかけるのです。

ライブは意外と孤独な授業ではないのです。

緊急事態宣言が解除され、様々な自粛要請も緩和されてきましたので、大学も次第に正常化に向けた動きを始め、対面授業の一部再開など学園再生の取り組みは始まっています。感染症予防を行い、大学としての務めを果たすべく龍谷大学は前進して参ります。

本年度は黒井地区で政策学部の学生の現地実習を丹篠支部、黒井地区的皆様のご協力をいただき進めてきました。コロナ禍がおさまり、安全に活動ができる状態になりましたら改めて実習ができますことを願っております。

今後とも校友の皆様の変わらぬお力添えをお願いいたします。

龍
谷
大
学
政
策
学
部
教
授
只
友
景
士

活躍する 校友

年を重ねるほどに懐かしくなる学生時代。そんな思い出を糧にして、作歌活動や地域活動に励む2人の交友に寄稿して頂きました。

(株)EGサイクル(自営)

<https://eg-cycle.com/>

前川 悅子さん

まえかわ えつこ



に至るまで、短歌は私の人生と共に走っている。なぜ続いたか。
元々読んだり書いたりすることは好きだったけれど、それだけが理由ではない。何よりも大きいのは宗政先生があられたから。「あけぼの」に入って間もなくの大宮から深草に向かうスクールバスの中で、私の隣に座られた先生が、『あけぼの』掲載の私の小文をとても褒めてくださり、「あなたね、文章書きなさい」と言られた。20歳の私は天にも昇る気持ちで、その夜母に手紙を書いた。それから幾度励まされただろう。歌も文章も先生は手慣れた俗な表現を戒められた。「清新に、リリカルに」と。

卒業して就職した神戸から、結婚し帰郷した丹波から、機会を見つけては大宮学舎の歌会に出席した。雨の中、生後半年の長男を抱いてやっとの思いで辿り着いた時、先生は目を丸くしてポットからお湯を注ぎミルクを作ってくれた。

角川短歌賞の最終候補に残ったとき、「これくらいでいいです」という私に、「私はこの年齢になっても歌に変化を望んでいます。これでいいと思ったらそこで終わりです」と、すぐにお返事がきた。歌詞考証をなさっていた都をどりの観覧や、私達同人を引き連れて祇園のお茶屋へ、鴨川の床へと繰り出して下さったことなど幾つもいくつも思い出す。

この稿を書くにあたって「あけぼの」創刊から終刊号までをじっくりと読み返すと改めて感謝の念でいっぱいになる。

夫が独立して、ささやかな事業を始めた50歳からの数年は、生活も時間のやりくりも苦しく作歌も途切れがちになつたが、夜に小さな机に向かって「五、七、五…」と息を整えていると、不思議に疲れも吹き飛んだ。

先生、続けていますよ。もうすぐ先生が亡くなられた歳になりますが元気です。うれしいことにあけぼの時代の仲間とも会うことがあります。みんな続けているのですよ。そして私は郷土の丹波新聞に「うたの小箱」という短歌鑑賞のコラムを楽しく書かせてもらっています。

満開の桜樹の下に一頭の鹿逃げこみてその先は夜

支部メンバーの中では数少ない文学部出身で、お姉さんの存在。話しゃべり相談しやすい朗らかな人である。丹波市山南町南中住

農業(自営)

新才 博章さん

しんさい ひろあき



孫とのひととき

重量挙げで青春を謳歌

私は地元の学校運営協議会委員をしていますが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、卒業式、入学式の出席の要請はありませんでした。5月は田植え、6月には丹波特産の黒大豆の栽培で忙しい日々を送りました。



農業に忙しい日々をおくる

さて、大学時代のクラブ活動は重量挙(ウェイトリフティング)部に所属して、4回生では、主将を務めました。2回生の時には中京大学の選手と争い、西日本新人王(ライト級)になり、3回生、4回生時代の試合では関西大会において幾度となく優勝し、全日本学生ウェイトリフティング選手権大会にも出場しました。

大学卒業後は、地元の役場に就職。畜産業の先進地実習生(研修)として1年間、アメリカ・カリフォルニア州で、肉牛、酪農、飼料作物の栽培等を学んできました。実習はハードワークでしたが、運転免許証を取得し、レンタカーによるアメリカ大陸横断旅行は、素晴らしい思い出です。

市役所を退職後、それまで(約10年間)我が家の田んぼを預けていた人より、田んぼを返され、家の農業を始めました。農業をしていると、まず民生児童委員を依頼され、今度は自治会長、農地利用最適化推進委員、地元の村雲まちづくり協議会会長等を依頼(任命)される事となり、超多忙な毎日です。

息抜きは、地元の仲間とゴルフに行くことです。また大学時代の重量挙部の先輩・後輩とも、各地のゴルフ場へ出掛けて行きます。大学時代の先輩・後輩とはグループLINEで連絡を取り合っています。春は桜が咲けば丹波篠山で桜ゴルフ大会、夏は大阪に集合してビアガーデン、秋は各地方にて紅葉ゴルフ大会、冬は丹波篠山で牡丹鍋(ほたんなべ)ゴルフ大会です。このようにして毎日を忙しく過ごしています。

校友会、丹波篠山市向井在住のムードメーカー。学生時代の重量挙部の活躍ぶりや、豪遊などユニークなエピソードを聞くのが楽しみ。

支那のムードメーカー。学生時代の重量挙部の活躍ぶりや、豪遊などユニークなエピソードを聞くのが楽しみ。

自慢の観光スポット

前号からの企画で、観光スポットを紹介するコーナーは、丹波篠山市の無電柱化により江戸時代の城下町の景観を一新した町並み、丹波市山南町の丹波竜化石発見地とちーたんの館を丹波篠山市と丹波市に住む校友が案内します。



丹波竜のふる里PR



福知山線の電車を見下ろす丹波竜の実物大全身モニュメント

—丹波竜化石発見地や「ちーたんの館」—

丹波市といえば、「丹波竜」とその名が知れ渡っています。2006年(平成18)に市内在住の男性2人が白亜紀前期の泥岩層(約1億1千万年前)から、ティタノサウルス形類の肋骨などの植物食恐竜化石を発見したこと、注目が集まりました。今年の6月には同じ地層から世界最小の恐竜卵化石(長さ約4.5cm、幅約2cm)も見つかりました。

発見地は市南部の山南町上滝の篠山川川代渓谷の篠山層群。篠山層群は、丹波篠山市と丹波市にまたがる地層。JR福知山線下滝駅下車徒歩20分で、自然豊かな景観、川代渓谷も一望できます。もう少し足を延ばすと「丹波竜の里公園」にある丹波竜の実物大全身モニュメント(全長15m、高さ7m)が目に入ります。ティラノサウルス恐竜スライダーや恐竜ベンチなども備えられ、子どもたちに大人気。

すぐ近くにある、地元が運営する複合施設「元気村かみくげ」では、化石発掘体験が楽しめるほか、恐竜グッズや恐竜焼き(地元産大納言小豆入り)なども販売しています。

下滝駅から福知山方面にひと駅行くと、谷川駅に着きます。駅から徒歩20分のところに丹波竜化石工房「ちーたんの館」があります。ちーたんというのは、丹波市のマスコットキャラクターです。ここには、原寸大の丹波竜骨格図と丹波竜化石レプリカが展示されています。白亜紀前期のなかで、体骨格と頭骨の一部である脳函の両方が見つかったのは世界的に珍しいことです。

8月31日まで、夏期特別展として、「角竜の進化」(日本の角竜が大集合)が開かれています。ちーたんの館には、年間平均6万人の愛好者や観光客が訪れています。龍大の龍と丹波竜、親しみがわきますね。(臼井記)



原寸大の丹波竜骨格図と丹波竜化石レプリカ

校友が案内します



城下町の魅力高める



無電柱化で景観を一新した大正ロマン館(左側)周辺

—無電柱化で景観を一新—

丹波篠山市では、国の補助金を受けて、この3年間で国指定史跡篠山城跡を中心とした城下町地区の景観整備に関する事業が実施されました。この事業により景観重要建造物の大正ロマン館や青山歴史村の長屋門の外観修繕、道路の無電柱化や美装化、歩道の拡幅のほか、篠山城跡内では広場の整備などが行われました。

中でも、丹波篠山市役所の西側に位置し、かつては城内へ向かう正面玄関口であった市道大手線は、約300mの区間に渡る電線類の地中化とあわせて約1.8mの歩道が約3.0mに拡幅されたほか、その広がった歩道脇に歩行者の休憩スペースとなるベンチが設けされました。また、歩道がフラット化され、二階町交差点から城下町のシンボルである篠山城跡の美しい石垣や大書院が一望できるようになりました。来訪者などが快適に城下町を散策し、休憩できる広々とした空間に変わり、観光拠点の存在感が高まっています。

なお、妻入り商家が立ち並ぶ河原町通りも無電柱化事業を進めており、2021年には完了する予定で、歴史的な景観が向上し、城下町丹波篠山の魅力がさらに高まります。(細見記)



歩道脇のベンチスペース

龍谷大生が丹波市春日町で課外活動

政策学部

黒井地区 学生と住民との交流に期待

校友会本部理事・広報部会長の米田禎孝さんの昨年の支部会報に、「大学を巻き込んだ活動で、丹篠支部と龍谷大学のPR。そして会員獲得につながれば、校友会も協力します」という内容の文章が掲載されました。この言葉に勇気を得て、地域と大学をつなぐ活動を展開したいと考えました。支部理事会の承認、校友会本部事務局に背中を押され、丹波市春日町黒井地区と政策学部(京都市伏見区の深草キャンパス)との連携の道を模索しました。

黒井地区には、放映中のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」で丹波篠山市の「八上城跡」とともに脚光を浴びる戦国時代の山城「黒井城跡」があり、地域活性化に取り組む黒井城跡地域活性化委員会(吉住孝信委員長)に話を持ちかけたところ、「大学生の誘致は数年来の念願だった。元気の出る地域になるよう大学とスクラムを組みたい」と賛同をいただき、丹篠支部と一緒に校友会本部や大学への要望活動を続けた結果、政策学部の会議で承認をいただきました。

3月18日には黒井へ只友景士教授や榎並ゆかり実践型教育プランナーが訪問。吉住委員長、丹波市役所の福井誠総合政策部シティプロモーション推進室長(当時)や地域アドバイザーの中川ミミさんらとともに浅田芳生丹篠支部長ら支部メンバーが出迎え、交流会のあと、徳川三代将軍家光の乳母「春日局」(かすがのつぼね)出生地の黒井城下館跡(現興禅寺)、近衛家ゆかりの兵主(ひょううず)神社などを案内しました。只友教授らは、戦国時代の面影の残る町並みを歩き、黒井城跡を遠望し、歴史遺産の数多く残る町にひかれたようでした。まずは1年生の地域デビューという形で9月に学生を迎える段取りになりました。

ところが、新型コロナ感染拡大により、9月訪問は無理となり、後期に別のプログラムの学生の訪問を大学側で検討中です。大学生が地域住民に寄り添う交流が期待されています。

「地域の少子高齢化が急速に進み、先が見えない。学生との交流で町の人の心を変える。町の気風を変え、地域で目に見えたものを作る」という大学の掲げる活動に期待している」という住民の声も聞かれ、支部としても支援をしていきたいと思います。



大学と地域の連携について意見交換する関係者



兵主神社を訪問した只友景士教授(左から2人目)と榎並ゆかり実践型教育プランナー(中央)ら

校友会丹篠支部役員名

(卒業年次・学部・住所)

- △支 部 長=浅田芳生 (1974・経営・丹波市)
△副支部長=篠倉庸良 (1976・経営・丹波市)
 新才博章 (1976・法学・丹波篠山市)
 山内佳子 (1978・経営・丹波市)
△事務局長=芦田淳一 (1974・経営・丹波市)
△会 計=村上佳邦 (1982・経営・丹波市)
△理 事=向井祥隆 (1971・経済・丹波篠山市)
 前川悦子 (1971・文学・丹波市)
 大地常夫 (1973・経営・丹波市)
 齋藤純一 (1974・経営・丹波市)
 臼井 学 (1977・法学・丹波市)
 細見英志 (1998・法学・丹波篠山市)
△監 事=藤本雅浩 (1987・法学・丹波篠山市)
 塩見眞吾 (1988・経営・丹波市)



あぐりフェスタに参加した金子農学部講師(左から2人目)やゼミ学生、地域住民、丹篠支部のメンバーら=春日総合運動公園で

編集後記

今年に入り新型コロナ感染が全世界に広がり、国内でも4月に非常事態宣言が出され、自粛ムードが広がりました。例年の支部総会も書面決議となりました。年1回の会員同士、また校友会本部や大学との情報交換ができなくなったのは残念です。そのようななか、3回目の会報をお届けすることができたのは、校友会や大学、会員の皆様のご支援、ご理解の賜物と感謝いたします。

また、丹篠支部が橋渡しをした地域と大学の連携が実現のめどが立ち、うれしい限りです。若い学生の姿を見ながら自分自身の学生時代を振り返る、そんな日がやってくることを願っています。どんな困難な時代が来ようとも、龍谷大学の建学の精神である「平等」の心、「自立」の心、「内省」の心、「感謝」の心、「平和」の心を大切に、地域とともに歩んでいきたいと思います。

(編集委員 浅田、芦田、臼井)



農業について聞き取りをする農学部の学生たち